



少年少女のための

詩集

# 未来

大木 實 著



詩集

未来

大木

實 著



さ・え・ら 書房 刊



高橋喜種様

大木

實



# 未來



詩  
集

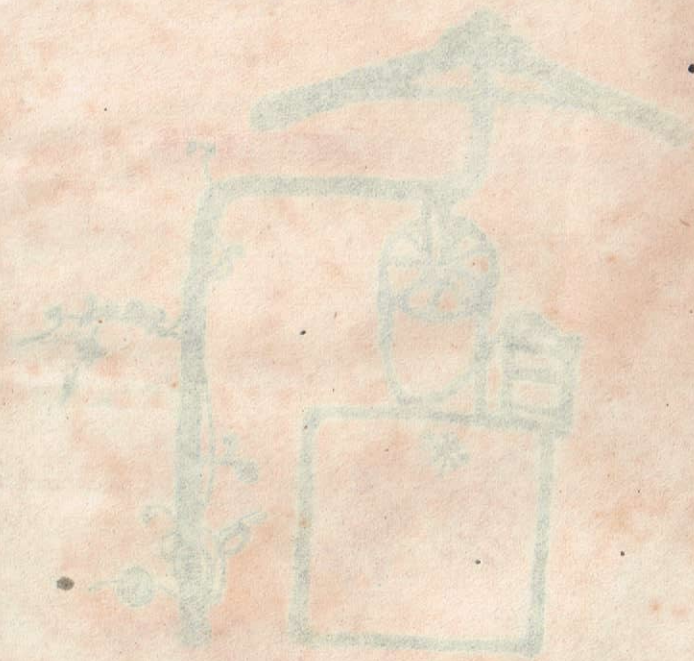
大  
木  
實



目次

1

川のゆくえ	三
火	十四
愛	十六
屋根	六
あしおと	二十
麦の穂	二十二





時	計	二十四
子供の家		二十六
約東		二十八
子供泣く		三十
未	來	三十二
未	來	三十四

若葉は美し	三十八
花のいのち	四十

花	四十二
路地	四十三
路地の井戸	四十四
そのひとつは	四十六
雪のゆうがた	四十八
猫	五十
ひみつ	五十二
椎の若葉	五十四
桃の花	五十六
月のひかり	五十八
祭の日	五十九



山の湖

九十五

4

夜明け

九十八

暮春

九十九

井戸

百

一家

百二

ふるさと

百四

ふるさと

百六

おぼろ夜

百八

家

百十

ろばた

百十二

兄弟

百十四

さるかに合戦

百十六

柿の木のある家

百十九

峠

百二十一

あながき

百二十三



未

來

装幀・カット

初山

滋



1



川のゆくえ

枯草のかげ 小石のうえ

ぼくらが毎日わたる

橋のしたをながれて

大きな大きな川になるのだって

つくつかの村を通り

いくにちかの旅をして

川しもは海になるのだって

そこには大きな町と港があるのだって

ここは山の分教場

ぼくらは山の子

山を眺めながら 雨の午後

先生は遠い國の話をしてくださった

ああ ぼくらの知らない海

にぎやかな大きな町

ぼくらはいつかゆくだろう 川をくだって

ぼくらはいつかみるだろう ほんとうの海を





火

かまどの火が燃えている  
暗がりにかまどの火が燃えている  
家のものはみんな眠っている  
空もまだ暗い夜明けどき

その火を焚たいているのは  
母である 妻である 娘である  
朝はどこの家でもかまどの火が燃えている

その火を焚たいているのは女である

その火は 女の手から  
女の手へつづいてきた火だ  
夜明けの暗がりだ 日本の女たちが  
大切に傳えたえられてきたかまどの火だ





愛

いくらあたえても

どんなにうけても

これであしまいということがない

泉のようにこんこんと絶えずあふれてやまない愛

父母の愛 兄弟の愛

先生や友だちの愛 隣人の愛

この世にはこんなにあくさんの愛がある

ゆたかにわたしたちをつつむ愛がある

あかんぼの寝顔をみるとき

雨にぬれた燈火あかりをみるとき

かなしいやさしい涙がわき

愛し愛されたい氣持でいっぱいになる





屋  
根

山野をかけて

木の実をひろい

獺かぶりや漁すなごりでくらししたころ

ひとは穴をほって住んだ

かたちばかりの屋根をふいて

やがてひとのちえは

火をつくった



鉄をつくった

また種子たねをまいて

耕して得ることをしり

地のうえに家をつくった

草屋根

板屋根

瓦屋根

つねにわたしたちの生活のうえにある

屋根

屋根のうえの

大古の星



あしおこ

ゆうがた屋根をふむあしおとを  
だれもきかなかつたであらう

それはかすかなあしおとだつたから  
病<sup>や</sup>んでねていたわたしのほかには

あしおとは夜明けとともにまた  
屋根をふんでかえつていったが



だれも知らなかつたであらう  
ひとりさめていたわたしのほかには





麦の穂

みんな失<sup>な</sup>くなくなってしまった  
みんなどこかへ行ってしまった  
これがぼくたちの住んでいたところか  
これがぼくたちの町のあとか  
だれがこわしてしまっただのらう 跡かたもなく  
だれがもって行ってしまっただのらう  
石ころや鉄くずや瓦のかけらばかり残って

ただ風ばかり吹いている  
風のなかで麦の穂がゆれている

——穂跡にて——





時計



ある日町を歩いていたら  
とつぜん正午のサイレンが鳴りわたった  
何気なく 通りすがりの  
薬屋をのぞいたら  
そこの柱時計は十分過ぎていた

わたしはつきつぎとのぞいてみた

本屋

雑貨屋

くだもの屋

まるや四角や

時計のかたちがさまざまのように

ある家では五分過ぎていたり

三十分過ぎていたり

またある家では正午前であつたり

針はおもいおもいの時刻をさしていた

その針を

町のひとたちは

なぜ正確な時刻に合わせないのだろう

家家の時計の針の

わずかずつの時刻のちがいが

どんな大きな意味をもつかを考えないのだろう



## 子供の家

日曜にぼくたちは出かけてゆく  
屋根に風見矢の見える家  
子供たちの家と書いてある  
そばに どなたでもおはいりくださいと――

花や野菜をつくるのが好きな子は  
花や野菜をつくる

兎や鶏の世話をするのは生きものの好きな子



こわれた道具や椅子をなおすのは手工の上手な子

また一雨の日曜は

しずかに本を読んだり 文章を書いたり

みんながいつしよにゆうぎをしたら

楽しいだろうなあ ぼくたちが

そうゆう家をもっていたなら

みんなが自分の道をすすみながら

手をつないで助けあい

仲よく働らいたり学んだりできたら

ずいぶん楽しいだろうなあ





約 束

ぼくたちは約束したっけ あのととき  
きみおぼえている

写生をしながらきみは聞いたっけ  
大きくなったら何になるって——

とおく ぼくたちの学校や  
火の見や町の家家が見える  
丘にならんで仰いだ空を

雲がきれいにながれていたっけ

ぼくたち仲よくしようね

立派な人になろうね

——あの 日曜の約束を

ぼくたちはいつまでも忘れまいね



子供泣く

電車のなかで男の子が

大きな声をあげて泣きだした

子供はまだ四つか五つぐらい

なにが気にいらぬのか

お母さんがしきりになだめているのに

からだをゆすり じだんだふんで泣きわめいている

その声の大きいのにあきれ

その思いきった泣きぶりが



なんだかぼくは嬉しくなった

泣きたいときには泣きたいだけ泣いてくれ

どっかの男の子

きみの勢せじいっぱいの泣き声は

この世を明るくするひとつなのだ





未 來

太郎はきかんぼ

いたずらしては叱られる

叱られてもめったに泣かぬ

泣けばなだめてもすかしても泣きやまぬ

大きな声をあげて思いきり泣く

犬に吠えられても泣かぬ太郎

けんかに負けても泣かぬ太郎



そして草花が好きで唱歌が好きな太郎

誰にもえんりよや気がねをせず

つよくやさしく健やかに大きくなれ

おまえは目にみえて大きくなる

目にみえてちえがつく

腕はのび足はふとり

あゆみは日ごと確かになる

太郎

ためらわず歩いてゆけ

千里万里のとおい未来へ歩いてゆけ



未 來

授業のあと 先生がおっしゃった  
やさしい眼差<sup>まなざし</sup>してぼくたちを  
頼もしそうに見渡しながら

「きみたちが新しい日本をつくるのだ」と

ぼくたちのなかにいる

未來の学者や技師や政治家

ぼくたちのなかからうまれる



ゲエテのような詩人 セザンヌのような画家  
ベートオベンのような音楽家

ああ そしてぼくたちの手で

ぼくたちのちえと力で

よろこびに充<sup>み</sup>ちた人生を

美しい日本をつくらう

五月の空のように

明るく涯<sup>は</sup>しないぼくたちの未來よ

時を告げる鐘の音も

ぼくたちの未來を祝うようだ





2





若葉は美し

あれは

何という木だろう

いまうまれたばかりのようならすみどり

梢こぎえにゆれながら

若葉は花のようだ

花のように美しい

「なち梢の若葉だよ」

友はこたえながら



「きみは何も知らないね」と笑った

ほんとうにわたしは何も知らない

木の名も

草の名も

それはわたしが町で育ったためだろう

そして草や木の美しさを知らなかったためだろう

わたしは知りたい

眼しに沁みる 梢の若葉よ

世界はいつからこう美しかったろう

そうしてそれはなぜだろう



花のいのち

花はあけがたの

どういう時刻にひらくのだろう

井戸の近く 朝あさ咲いて

水を汲むたびあざやかなすがたにひかれる

けさ ぼくは早起きをした

かたわらに立ち あけがたひらく

花のひみつを知ろうとちもった

空にはまだ星があった

そしたら母に呼ばれた

家にはいつて急いでもどった

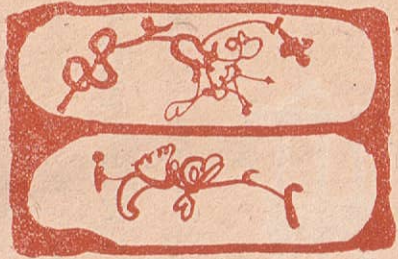
その短かいあいだに いつものように

花はあざやかにひらいてぼくを待っていた





花



いつ散るともなく

道にこぼれて

落ちても紅く美しい百日紅

落ちてどこへゆくのだらう

花はなぜ散るのをいそぐのだらう

路地

ひるまえの路地の静けさ

ひなたの明るさ

子供たちはみんな学校へいっている

おかあさんたちはせんたくでいそがしい

どこかの家で時計がゆっくり

九つ打つ



路地の井戸

路地をはさんで家がある  
路地の奥にも家がある

——その路地に井戸がひとつ

誰かしらいつも水を汲んでいた  
朝は暗いうちから夕べは暗くなっても

——それはあるときは手あらに あるときは静かに

ある朝わたしはみた  
誰もいない井戸ばたに  
雀が一羽遊んでいたのを  
またある夜ふけ流し場に  
月のひかりがこぼれていたのを



そのひごつは

そのひとつは溝に落ち

そのひとつは鳩に喰われた

そのひとつは屋根に飛び

屋根のわずかな土のあいだで

芽となりつるとなり花を結んだ

花は屋根裏の

貧しい病んだ娘をなくさめ

娘の病いはいつしかいえた



——昔読んだ豆のゆくえというお伽話

——なぜか忘れずありあり思いだすアンデルセンのお伽話





雪のゆうがた

雪はやんだが眞白に積った

誰だろう 窓からのぞいていった子は

——雪のゆうがた

靴をなくしたはだしの娘

アンデルセンのお伽話のマッチ賣りの娘よ

貧しく

病む子には薬を

ひもじい子には温かなスープを

母のない子にはまどかなゆめを

こよいはどうかおあたえください



猫

のっそりと猫がはいってきたが  
ぼくを呼ぶように「にゃあご」とないた  
ぼくの顔をみあげて

また「にゃあご」とないた

だまって猫の顔をみていたら

しばらくたつてからもういちど

「にゃあご」とないていつてしまった

猫にも寂<sup>さび</sup>しいときがあるのだろうか

生きもののかなしさを

ぼくは一匹の猫の眼にみた





ひ み つ

ふとんからでている

あかちゃんのみたつの手

その小さな手が

大切そうににぎっているもの

ひらいてみれば 何もなし

手のなかはからっぽである

けれど 放せば

ひとりでにこぶしをつくる  
大切なものをしまっているように

小さなその手のなかに ねむるまも

あまえばどんなひみつをにぎっているの





椎いの若葉

腕のあかごは

ふしぎそうにみつめてゐる

若葉した椎の木を

梢のゆれるのを

あかごのひたいはうすく汗ばみ

頬のうぶ毛がそよいでゐる

風のわたるたびさやさやと

若葉はゆれる 光りと影もゆれる

ああ 小さなその手をわたしの胸によせ

まばたきもせずいっしんに

あかごのみつめてゐるものは何だろ

う あかごのきいてゐるものは何だろ



桃の花

お母さんがいけていった

桃の花

ことし四つの男の子が

いたずらしている

いたずらしながら

ひとりごとをいっている

——あかい花

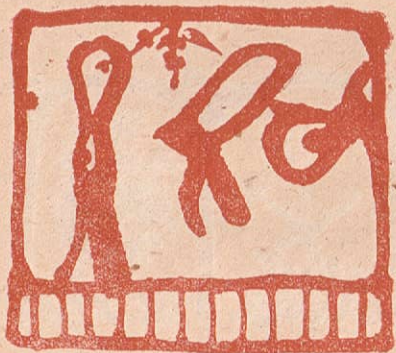
——なぜあかいんだ

そうだ

なぜだろう

なぜあかいのだろう

桃の花





月のひかり

板の間のすみで

泥をかぶってねている芋

わらでくくられたほうれん草

水洗いされて 白いところはいつそう白く

青いところはいつそう青いねぎ

みんないま目をさまし

語りあっているようだ

月のひかりにぬれながら



祭の日

おまつりのはやしがきこえる

みせもの小屋の呼び声がきこえる

楽しみにしていたのに

ふところの小さなさいふに ちかねがはいっているのに

こどもは毬まりをだいて

あとなしく雨をみている



都会のゆうぐれ

坂のうえからみる

ゆうぐれどきの町のあかり

都会のゆうぐれは

そこにもここにもあかりがついて

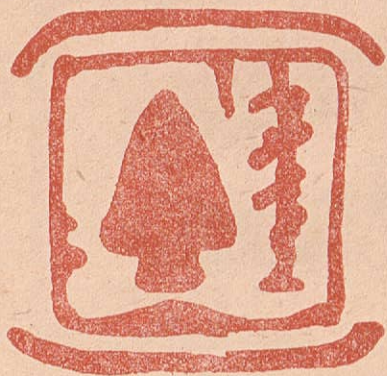
それはたくさん家族たちが

あたたかく寄りあつているようだ

そのあかりのあたりから

声ごえや

寂しいゆうぐれの物音がきこえてくる  
きょうもどこかであかどが泣いている  
子供を呼ぶお母さんの声もする





電車のなかで

電車のなかでわたしはみた  
だかれてねむるあかちゃんを  
ねむりながら小さなその手が  
お母さんの胸のあたりを  
つかんでいるのを

また わたしはみた  
あかちゃんをだくお母さんの

心配まなそうな眼まなざしを  
優やさしそうなほほえみを

こみあうゆうがたの  
電車のなかでわたしはみた  
まわりのひとたちが  
だまつてみんなであかちゃんと  
お母さんをかばうのを





電車のなかで

また

ある日

こみあつた電車のなかで

あかちゃんが泣きだした

あかちゃんの顔をのぞきこみ

切符をさりにきた

女の車掌さんが

「ちよよしよし」とあやしていた

あかちゃんはやつぱり泣きやまなかつたが  
そしてそれだけのことだが  
なぜだかわたしはその日のことが忘られない



夜 道

駅からの帰り道

あかちゃんをだいた女のひとといっしょになつた

その女のひとの荷物をもつてあげる それから

あかちゃんをしばらくだかせてもらう

あかちゃんはまるまると肥って

おちちくさい匂いがする

そのおちちくさい匂いのなつかしさ

歩きながらさく

あかちゃんは三月さんがつうまれたそうである

うちの姉さんのあかちゃんとおなじである

あかちゃんを返して

また荷物をもつてあげる そしてまがり角で別れる

「さよなら」とのをけば

あかちゃんは声をたてて笑う

さようなら どこかのあかちゃん

丈夫でしあわせにくらしてください



先生の家



むかし夏目漱石先生が

お住いになったという家

垣根がこわれて

屋根に落葉が積っていた

先生はこの家で

「吾輩は猫である」をお書きになった

それはわたしの知らない四十年のむかし

そして先生は すでに亡い——

また 別の日

その前をひとり通った

白い障子がしまつて

ひっそりとしていた



坂

暗い空のしたに  
低く町が沈んでいる  
この世のいとなみが  
そこでほそほそと  
つづけられているのだ

はなやかで  
いつまでもみていれば



寂しいあかり

ひっそりとして坂の道は  
あかりのつく町の方へ降<sup>くだ</sup>ってゆく







陸橋

枕木もぬれ

線路もぬれ

陸橋<sup>はし</sup>のむこうの

町や樹木もぬれている

ぼくの帰ってゆく家の

屋根もぬれているだろう

陸橋<sup>はし</sup>のしたを



窓がらすをぬらして汽車がゆく

ただずむぼくを煙がつつむ

この汽車のゆくところ

とあいぼくの知らない町も

きょうの雨にぬれているだろう

日くれて

陸橋<sup>はし</sup>もぬれ

あかりもぬれ

ただずむぼくの肩もぬれる



汽 車

ここからは読めないけれど

窓のしたにかかっている あの汽車の行先を

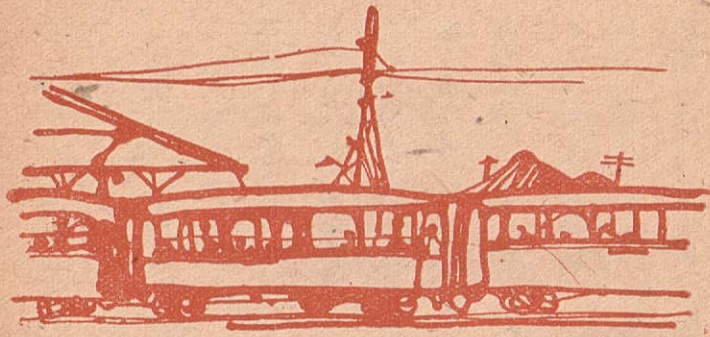
ぼくは知っている

あの汽車は茨城いばらきへ行く汽車だ

茨城はお母さんのうまれた國である

行って見たいな

茨城はどんなところだろう



汽車の窓にはあかりもついた

窓窓には知らないひとたちの顔がならんでいる

ひとつの窓から子供が顔をだした

ぼくに手をふっている

機関車はさかんに黒煙をあげ蒸氣をふいて

発車を待っている

どんなあしたがあの一とたちの行先に

まっているのだろう

そうしてぼくには どんな未来がまっているのか――

ゆうがたの停車場で汽車を見ている

ぼくの胸はいっぱいになった



母のふるさと

平野のなかに

母のうまれた町がある

低い山のふもと あちい田畑にかこまれて

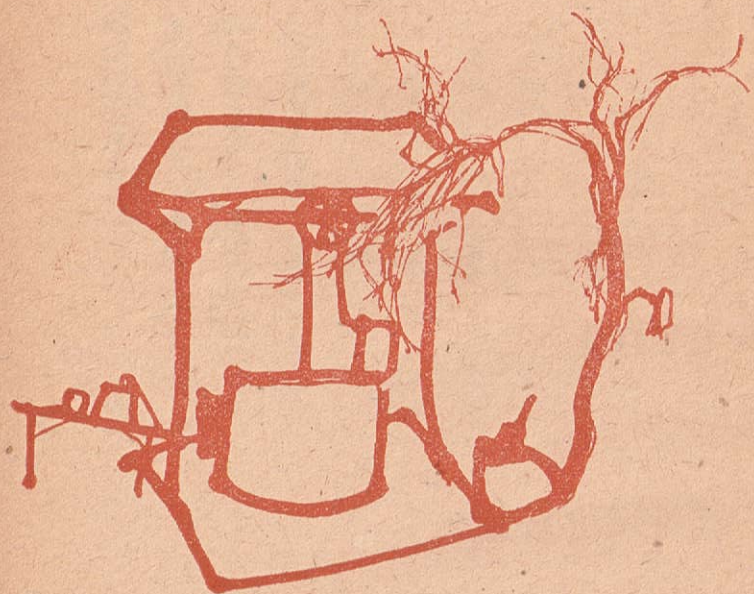
寄りあうように並んでいる草ぶき屋根 瓦屋根

火の見やぐらや土藏の白壁<sup>かべ</sup>

そして小さな停車場に

汽車の着くたびにぎわいをみせる

旅館 みやげもの屋 飲食店



その表通りから

筑波へかよう街道のほとり<sup>みち</sup>

母のうまれた草ぶき屋根の家がある

背戸のとり小屋 すももの木

水を汲むたびからからと

空に鳴りひびく

車井戸の滑車の音のなつかしさ

母は流し場で食器を洗い

そのかたわらで

のどをならして水を飲んだ

幼かった日はきののうのような



眼をつぶると

まぶたのうえにあかりはうつり

母のふるさと 常陸ひたちの岩瀬いわせの町は

そのあかりのなかに眠っている

### 停車場にて

雨の朝は

子守たちはどこへもゆけないのだらう

ふたり三人と連れだつて

どこからともなく集ってきて

ここのベンチでやすんでいる

小さなこの子たちは

もう世のなかへ出されているのだ



その手はあかくふくらんで  
寒そうに息をふきかけている  
子守たちよ  
もつとこつちへお寄り



### 北陸海岸

山は海岸にまでせまっていた  
海岸にはしら波が高く碎けていた  
山と海岸にはさまれて  
わずかな田があった 田には氷が張っていた  
石を載せた家があった その軒したに  
干大根がつるしてあった  
ずきんをかぶりまんとを着たひとが歩いていた  
ひとは立ちどまりずきんにつつんだ顔をむけて汽車を見送った



## 北陸沿線

北陸線東岩瀬駅構内に

屋根のない貨車がひとつとまっていた

あねさんかぶりの女たちが

もっこをになっていた

女たちは前掛をして地下足袋をはいていた

みぞれのなかを川から砂利じりを運んでいた

みぞれのなかで女たちはあかい頬をしていた



## 信越國境

関山 田口あたりは雪が降っていた

家は雪に埋れて

黄ばんだあかりをともししていた

汽車の窓はいきでくもり

外はいつまでも雪明りであかるかった

いつか暗くなっているのに気づいて

窓に顔をつけると

雪は消えていて 汽車は星のかがやく

善光寺へくだっていた



雨の日の田舎の町

雨にぬれ

雨にくれた家家に燈ひがともった

家家のうしろを川がながれていた

その川のうえにも雨は降っていた

川のむこうにも

知らぬ町はつづいていた

その町町の燈もけむっていた



山 國

白壁と

障子の白い家

軒にほし柿と大根がつるしてあった

家家は

道に沿い

道は山かいをつづいていた



残 暑

きのうぼくは 百里はなれた

北ぐにの城下町で

影しずかな小路を歩いてた

木にはかなかなが鳴いていた

あとといは 二百里さきの

岬の町の海岸にいた

そこでは風はつめたく

海には白波が立っていた

そうして僕はかえってきた

僕はすわっている机の前に

きょう九月一日 午後一時

残暑さびしく 寒暖計は華氏九十度



初 秋

秋は夜店のなかを歩いていた

物賣るひとのうしろにいたり

のぞいて歩くこどもたちの目のなかや

すれちがう少女のたもとにかくれたりした

北ぐにの小さな町の

八月の宵

空には星が美しく

風がないのに涼しかった

裏通りにある氷屋で飲んだソーダ水  
そのストロウのなかにも秋はいた





晩  
秋

葉のない梢に

まだ残っている

あかい柿の実

秋のかたみのように

梢に残っている

柿の実のいくつが

日にいくたびか

もずのするどい声がする

秋をついはみ 冬の仕度をいそぐように



甲斐路

商人と老婆が降りていった

柵まきにより子守がひとり汽車を見ていた

八ヶ岳やがたけのすそ

信濃しなのと甲斐かいの國境あたり

さびしい田舎の駅で ながい停車

——すれちがう汽車を待つ間のひととき

崖がけのうえにすがれた芒すすきや穂草ほくさがそよぎ

山の端はに日は いろうとしていた



山の湖

山のみずうみに

晝は山がうつっていた

夜は湖畔こほらの村村の

あかりがうつった

あかりは風にゆれながら

夜ふけひとつずつ消えていった







夜 明 け

滑車かろしやの音で目がさめる

水汲む井戸の滑車の音で目がさめる

夜明けの天から

からからからから聞えてくるさわやかな

その音よ

耳をすませば母の声もする

暮 春

幼な子の泣く声がする

お母さんの歌う声がする

逝ゆく春の日のゆうぐれを

かなしいゆめをみて泣くのはどこの子

泣くがよい お母さんに抱かれて

眠るがよい お母さんの歌を聞きながら





井戸

柿の木こそばにある井戸

のぞけば顔がうつり 柿の木と空がうつる

また夜は星が見える

その井戸の水はあまい

夏はひやりと冷たく

冬はほのかに温かく



紙に包んで魚をつるし

西瓜をさげてひやしたりした

水を汲むたびからからと滑車かっしやが鳴った

父が子供こどものときからあるという

ふるさとの井戸

ぼくたち兄弟あなごの産湯うぶゆの水を汲んだ井戸



一 家

風をふせぐのは雨戸である  
雨をふせぐのは屋根である

いろりには火が燃えて 家のなかは暖かい  
嵐の夜も家のなかは静かである

父は夜なべにわらを打ち  
母はつくろいものに忙がしい



幼いものたちは頭をならべて眠っている  
その幼いものたちの頭のうえ 古い釣りランプがともっている



ふるさとい

桑畑の向うにとりの家がある

日のくれ 煙があがり燈火がつく

縁の雨戸を繰りながら

「ちうい」と大きな声で呼ぶ

しばらくして「ちうい」と返事がある

「あしたまた遊ぼうや」

「遊ぼうや」

その家に 宗ちゃんという友だちがいた――

山はくれ

鳥屋とやのとりたちもねてしまった

そしてせせらぎの聞えるあたり

今夜も星が美しい



ふるさと

さみだれのけむるゆうがた

柿の花のいくつかは 地に落ちてぬれていた

幼いわたしは母に負われ

わたしの手には絵本があった

その帰り道 なかばひとりごとのように母はきいた



「お父さんとお母さんとどちらが好き」

さみだれのけむるゆうがた

遠い日の母の背はあたたかくやわらかかった



おぼろ夜

水面にひびいて 鯉こいがはねた

障子をあけるとあまく藤の花が匂うて

おぼろ夜であった

詩の話を それから信仰の話をしてくださった  
言葉を改め先生は言った

まじめに どんな道を選んでも

まじめに生涯をつらぬきなさい

また 鯉がはねた

わたしは眼まなざしきよく頬のゆたかな

少年であった



家

この家でお父さんがうまれた

とあい村からお母さんはおよめにきた

お父さんがごどものときからあるという

土間の石臼いす いろいろうえの釣りランプ

いろいろにそだをくべながら

お父さんはお話してくださった

むかしの話や世のためにつくしたひとの一生を

小さな弟はお父さんのひざに眠ったが

ぼくの胸は高鳴った

ぼくもりっぱな人間になりたいとおもった

お母さんはあそくまで

そばにすわってつくろいものをなさっていた

家の外には風がふいていた

ある夜は雨が降ったり 明るいお月夜になったりした

去年のいまごろ おばあさんはこの家でなくなつた

僕が世話している兎は六匹子をうんだ



ろばた

土間をはいると あがりばたに  
大きくきつてあるいろり  
いろりにはいつも火が燃えている  
釜がかかつて湯が沸いている

お父さんがすわる場所

お母さんがすわる場所

それからぼくと弟がすわる場所



お客さんがきてすわる場所

それはいつでもきまつている

誰がきめたわけでもないのに

ちゃんときまつている

みんないつもすわる場所へすわる

寒い雨の日 むかしの話を

お父さんに聞くのもそこである

暗い夕べ 家のなかを明るくする

あかりがつくのもそこである



兄 弟

わたしの家には男の子がふたりいる  
ふたりとも小学校の生徒である

うえの子は本が好きで  
ひまさえあれば本を読んでいる  
なにをおもうか眼をあげて  
ときおり遠い空をみつめている

したの子は家にいな  
山へのぼる川へゆく  
着物をやぶる草履をなくす  
手足に傷して帰ってくる

どんな未来がふたりを待たろう  
どんな生涯をふたりはじぶんで拓く<sup>ひら</sup>だろう  
兄弟でありながら ころもくらしも  
少年の日から別べつで――

うえの子は五年生 したの子は四年生  
毎朝仲よく肩をならべて学校へゆく



さるかに合戦

柿の木のしたに 弟がいる

柿の木をあおいで

「早くおくれ」と

くりかえしながら

柿の木の枝に 兄がいる

柿の実をたべながら

枝にこしかけ ふところに



赤い柿の実をのぞかせて

「ほくにもおくれよ」

その声は泣き声になる

「ほうれ やるぞ」

うえからひとつ投げてやる

嬉しそうにかけたした

そのときの弟のすがたよ

ひろいどり 兄をあおいだ

そのときの弟のかなしい眼よ



——弟よ

まだ青いいちばん小さい実を投げた  
わたしはさるかに合戦のさるのよう  
に  
いじわるい兄であった——

### 柿の木のある家

山のふもと草ぶき屋根の古びた家  
家の近く納屋なやと井戸のかたわらに

夏くれば白い小さな花をつけ  
葉がくれにつぶらな実をもつ 柿の木二本

その花をひろいその実をかぞえて兄弟は  
仲よく遊び泣きながらいさかいました



希望をもうて弟は家を出ていった  
兄は父祖のあとをつぎ百姓になった

峠

枯草を風がわたり  
向いの山にひる過ぎの陽があたっている  
冷たい岩清水が湧いてながれるところ  
そこに立つ一基の道しるべ

みかえれば道は白くひとすじつづき  
道ぞいの小さな家家 田や畑



峠を越えれば茨城いばらきの國

そして父の生れた栃木とちぎの國は見えなくなる



あ い が む

小学校の上級生から新制中学の年ごろのひとたちにこの詩集を読んでもらいたいと思ひます。

ここに集めた詩は、特にみなさんに読んでもらうために書いた詩もありますが、そうでない詩もあります。すこしむずかしい詩があるかもしれませんが、けれどよく読んでくださればわかってもらえると思ひます。わかるということは、詩の場合、言葉の意味を知るだけではありません。

みなさんのなかには詩が好きで、いろいろの詩を知り、じぶんで書いているひともあるでしょう。そういうひとにこの詩集を読んでもらいたいと思ひます。

また、みなさんのなかには、これまで詩は読んだことがないというひともあるでしょう。そういうひとにもこの詩集を読んでもらいたいと思ひます。



そしてこの詩集が、さらに深い詩の世界へみなさんを誘う縁となったら、嬉しいと思えます。

この詩集ができるまでには、浦城光郷さんにたいへんお世話になったことを記してお礼申します。

昭和廿三年十二月十日 印刷  
昭和廿三年十二月十五日 發行



未 來

定價九十五圓

著 者 大 木 實

發 行 者 浦 城 光 郷

印 刷 者 清 水 與 助

長野市大門町南三三

發行所

よ・え・ら 書房

東京營業所 東京都目黒區宮前町二  
長野營業所 長野市岡田町一六五

會員津波 A 二一九九九  
振替長野 一三二二三

配給元 東京都千代田市  
新田渡路町三九 日本出版配給株式会社

印刷・製本 柏夷印刷合名社







少年少女のための

詩集

未<sup>み</sup>來<sup>らい</sup>

大木 實 著







さ・え・ら書房刊